



CANOA だより no.

45

2009年12月発行

文・写真_鈴木真由美 編集_橋口博幸 発行_ブラジル事務局

Praia do Esteveao s/n, Canoa Quebrada, Aracati-CE-Brasil CEP: 62800-000

HP公開のお知らせ

もうご存知の方もいるかもしれませんが、まだ完成版とはいかず、残念ではあるのですが、当団体のHPの開設に向けて着々と準備を進めています。今後は皆さまからのご意見を取り入れつつ、充実したHPとしていけたらと考えていますので、ご意見、ご感想などぜひお寄せください。お待ちしております。

→ <http://criancasdeluz.org>

JICA 日系社会青年ボランティア

この度光の子どもたちの会（ブラジル現地法人）が JICA 日系社会青年ボランティアの派遣先の一つとして平成 21 年度秋募集より開始されることとなりました。残念ながら 11 月 9 日募集締め切りとなってしまったのですが、今後 2 年ごとに募集が行われる予定ですので、ご興味のある方はぜひ応募してみてください。

JICA 日系社会青年ボランティアについてはこちら↓

<http://www.jica.go.jp/activities/jocv/nikkeiseinen/index.html>

時の経つのは早いもので、もう二〇〇九年も終わりに近付いている今日この頃、皆さまいかがお過ごしでしょうか？ブラジルは南半球に位置するため、「年末に近付いていくこと＝夏まつしぐら」を意味します。クリスマスが夏。そんな季節に違和感を持っていないか私も、なぜか今年には違和感を持ち始めていることに不思議な思いでいっぱいです。数年前から感じている、「久しぶりに冬を体験したい」という思いが強くなっている証拠なのでしょうか。年度準備を進めている私たちであります。会員の皆様に至りましては、毎回同封させていただいている会費入金状況を参考に、お振り込みいただけますよう、お願いいたします。当団体が使用している郵便振り替えはこの郵便局のATMからでも行え、平日はもちろん、土・日・祝日問わず、九時から十七時まで行えます。皆さんの気持ちあつての私たちの活動です。忙しい中でも、一言コメントを書いて下さるのを拝見できるのは活動を継続していくための大きな励みともなっています。ご足労とは思いますが、継続した活動を行っていくためにも皆さまからのご支援、ご協力のほど、よろしくお願いいたします。

2009年のカノアは『準備』の年であったといえます。大きな変化を前にしての準備期間。そのために、今まで当たり前に行ってきたことに対してももう一度検討し、議論しながら進めていきました。そして、保育園や学童教室の運営や管理のほかに助成金を頂いての事業実施もあり、自分たちだけでは気付かなかつたであろうことをあらゆる方面から学ばせてもらっている。そんな一年でありました。

今年一年を振り返ってみると、まずフラビア二が研修のためにサンパウロのモンチ・アズールコミュニティー協会に旅立ったことから始まります。1年という長期間の研修。初めて家族から離れて暮らすサンパウロ。同じブラジル国内といえども、彼女にとっては異国と変わらないほど、文化や習慣の異なる地でのスタートはかなり大変であったらと想像します。それでも、現在では研修生ではなく、あたかも教師の一員であるかのように積極的に働く姿を耳にすると、嬉しさと同時に、誇りにさえ感じます。私たちの活動は現在、クラス運営に関しては各担任に任ずることができるほどになりました。しかし、活動すべてを統括できる人材を育成するまでには至っていません。将来的に現地の住民だけで運営していくことができるようになっていくことを大きな目標としているため、活動をコーディネートできるような広い視野を持った人材を育てる必要が出てきました。そこで彼女に白羽の矢を立て、サンパウロの研修へと送りこんだのです。

そして保育園や学童教室に通ってきている子どもたちの家族との関係に対しても考えさせられることがたくさんありました。よりよい教育を、地域の生活の向上を…そんなことを目指して行っている活動ではありますが、地域住民はそんな私たちに大きな甘えを持っていることが判明したのです。『私たちはピエロじゃないんだか

ら』と言ったことを受け、この問題にきちんと取り組んでいくことになりました。家庭訪問を積極的に行い、保護者会には必要な時に何度でも設ける。なるべく家族と近い関係で、尚且つ、率直な意見を聞きたい。これからのことを考えていくと、どのような信頼関係を気付くことがお互いにとって良いのだろうか。そのことを何度も何度も話し合い、検討を重ねました。その中で見つかったいくつかの課題。こういった取り組みがなければ見出せなかったことに違いありません。職員自らの発言により動き出したこうした取り組みは今後の活動の中でも大きな一歩となつたのではないのでしょうか。

そして公立学校との関係。残念ながらこの地域の公立学校は崩壊寸前となつてしまつた今年度。今まで二人三脚で取り組んできた学童教室に関しても、信頼関係を失い、共同での取り組みを見いだせない中、4月末まで学童教室の子ども的人数を確定することができませんでした。三部制のブラジルの学校。子どもたちも午前だと言われたり、午後だと言われたりして生活のリズムを作ることができません。現在（11月中旬）に至るまでクラス担任がいらない学年もあります。こうした不安定な教育環境だからこそ、私たちの活動が必要とされている。そう実感すると共に、どうすれば子どもたちにとって安心で、充実した活動を行えるのか。保護者との話し合いを重ねながら「これから」に取り組んでいるところです。

2010年。いったいどんな年となるのでしょうか。これからも地域に根差し、私たちの大きなテーマでもある、「子どもが子どもらしく幸せに子ども時代を過ごすためには？」を心にとめ、一人ひとりが将来を自ら選択していくことができるように支えていけたらと思っています。皆さま、今後ともご支援・ご協力のほど、よろしくお願いたします。

助成金事業報告

味の素の支援によるプロジェクト

味の素「食と健康」 国際協力支援プログラムより、『園庭菜園及び地域で入手可能な食材を利用した子どものための栄養給食プログラム』として二〇〇九年四月一日〜二〇一一年三月三十一日までの事業を実施することとなりました。大きな一歩となったのは、『健康診断』の実施です。ブラジルは「予防」に対する概念が私たちとは異なるのか、子どもたちは今まで健康診断というものを受けたことがありません。新生児から半年までの乳児は定期的な身体計測があるのですが、それ以降、保護者が個人的に子どもを診療所に連れて行かない限り、定期的な計測を行うことはないのです。そんな中、この事業の専従栄養士が健康診断の実施を取り入れました。

この取り組みは地域や家族に大きな影響を与えていることは言うまでもありません。また、フォルタレーザ大学（栄養士の所属大学）の全面バックアップを受け、今後交流プログラムや定期的な検査の実施も行われていく予定です。また、園庭菜園では子どもたち自らが世話をすることにより、野菜嫌いであった子どもも積極的にサラダや煮物を口にするようになってきました。ある家族は『子どもが作りたいと言って庭に菜園を作ったのよ』と言うほど。こうして少しずつでも自分たちの手で野菜を育て、子どもたちの健康が今以上に安定することを願うばかりです。「栄養改善」というのは給食などの「食」を通じた活動のみならず、こうした子ども「健康」全体を取り巻く環境を改善していくことが大切なのだということを、この事業を通じて私自身学ばせていただいています。



地球市民財団の支援によるプロジェクト

『ブラジル東北部貧困漁村地域における幼児教育者育成事業』として、二〇〇九年四月一日〜二〇一一年三月三十一日まで事業を実施する予定です。アラカチ市社会福祉局と協力しながら幼児教育に関わる教職員三十名に対して行われる本事業。現在第二回まで終了しました。この講座には保育園や学童教室に通う保護者にも積極的に参加してもらいたいと、参加を促しています。その結果、五名の保護者が講座に参加してくれました。また、市の職員も定員以上の参加となり、「幼児教育（〇〜六歳児）」に対する興味が高まっていることが分かります。第二回目は「胎内から自然のお産を経て…」をテーマに開催しました。個々の体験を発表したり、保育の事例を発表する中で『自分だけが苦しんでいたんだ』『私だけが悩んでいたかと思っていた』ということが、実は乳幼児に関わっている人の多くが抱えている問題や課題なのだということを確認できたことは大きな成果であったのではないかと思います。この中でとても興味深かったのは、『自分への手紙』と題するレクレーションでした。それぞれが日常の不安や心配を手紙に書き、匿名で投稿する。そして、その中から数枚を皆で共有するのです。手紙に書かれている不安や問題に対して、皆で意見を出し合うのですが、これが本当に良かった。それぞれが真剣に向き合い、取り組む姿勢は多くの人にとって実践にも生かせるものではないかと感じさせてくれました。ただ学ぶだけではなく、実践に生かすことのできるような講座にしていきたい…と意気込みを新たにしました。



子育て日記より

ある日、出産したばかりの女の子（十六歳）が我が家に来てきて、

お腹を引つ込めるためのガードルか腹巻はないかと聞いてきました。聞くと、祖母に昔ながらの儀式(?)を覚えてもらったのですが、笑ってしまつてできないというのです。その儀式とは：毎日決まった時間に足踏み三回、三歩前進、家の大黒柱にお腹をぶつけ、三歩後進、足踏み三回…というのを繰り返すというのです。これにはお腹を引つ込めるといっただけでなく、家の中で生まれてきた子どもが安心して、大事に育てられることを祈るものだと思います。こういった昔ながらの儀式というのはただ「お腹を引つ込めたい」ということだけを望んでいる場合には笑い物でしかないかもしれません。この儀式でお腹が引つ込むとは思わないですし…

しかし、それに付随するもの。体を動かすことによる日常生活への回復、精神的な安定、子どもへの願いや家族の関わり。こういったことで得られるこれら（もしかしたらもっと多くのことがあるかもしれないですが）の役割の持つ大切さというのを考えさせられました。この村でもこういった伝統的な事柄が失われつつあります。実行しないまでも、こういうものがあるのだと、子孫に継承している姿を知ることが、私にとって本当にうれしいものです。まだ知らない多くの伝統的な儀式。どんなものがあるのか興味津々の私です。

スタグデイツアー報告

福井俊紀

失われている価値観

カノア・ケブラーダを訪れた人々が口をそろえて言うカノアの素晴らしい大自然については私も同感で、今回の滞在期間中も、毎朝のように新鮮な朝日と海のミネラルを含んだ潮風を浴びながら思わず幸せポーズをしていた。その姿は今思い出してみると、植物が思う存分に光と水と大地のエネルギーを吸収しながら光合成しているかのようだった。

私にとって一年五ヶ月ぶり、二度目のカノア・ケブラーダ滞り。前回の二ヶ月間の滞在は私の人生の中でも一二を争うほど強烈であり、大切な思い出である。私はCZが実施しているサンパウロ、モンチ・アズールでの保育園建設プロジェクトのスタッフとして、一年ぶりにブラジルに帰って来ることができたが、ブラジル行きが決まってから少しの期間でもいいので、またあの思い出の地カノア・ケブラーダを訪れたいと思っていた。なんとかサンパウロの仕事で二週間の休みをもらい、飛行機とバスを乗り継ぎ約十二時間、ついにカノア・ケブラーダの隣街アラカチまでやってきた。胸がドキドキする。期待と共にもしかしたら村のみんなは自分のことを忘れていたのではないかという不安も混じっていた。

人間には「相性」というものがある

が、私とカノア・ケブラーダという地は相性がいいと思う。そこにいるだけでなぜか嬉しい。喜びを感じる。私の不安とは裏腹に村人たちは意外にも私の名前を覚えていてくれて、つい昨日まで一緒にいたかのように、「よう、トシノリ」と普通に挨拶してくる人が大半だった。まるでタイムスリップしたかのよう。ただ、村の裏側の景色は変わっていた。とてつもなく大きな風力発電機が五基、砂丘の一番上で堂々と立ちほだかっていた。グローバリゼーションと開発の波がこの村に押し寄せているのは確かだった。

ある日、青少年たちとごく普通に村を歩いていると、彼らがササッとそこらになつている木の実を採って「この木の実が甘いよ」とか言って差し出してくれる。乾燥したヘチマの実を見つけてはむしり採り、「これで体を洗うと気持ちいいよ」なんて言って五十個も百個も集めてくれる。夕方になると、夕日を見に行こうと言って誘ってくる。満月の日は夜空の下で海水浴。彼らは村の魅力を私たちにふるまいたが、一生懸命その村を紹介してくれていた。

そこで、ふと思った。グローバリゼーションや開発の波が押し寄せているこの村の人々であるが、彼らはこの村の魅力を大切に、誇りに思っているのではないか。それは無意識かもしれないが、彼らは自分たちなりの価値観を持ち続けている。逆に、モノや情報が入り乱れる現代の日本社会で生きる自

分は何を大切に思い、誇れるものがあるか。自分の価値観とはどんなものなのか。もしかすると、波に飲み込まれそうになっているのは私の方かもしれないことに気がついた。

このように日本に生まれた私たちにとって一見カノア・ケブラーダは別世界と思いがちであるが、私たちとつながる事柄や問題がたくさんあるのではないだろうか。私はこういったブラジルで活動できる機会に恵まれたからこそ、いろんなことを考え、取り組んだ成果を日本へ持ち帰りたい。

鈴木康平

ブラジルとこれからも関わり続ける

一、エステーヴァン村の光と影
日本の裏側にあるブラジルの北東部に位置するエステーヴァン村は「地の果て」と言っても過言ではない。今の日本、私の住む町にはにない自然、時間の流れ、人との繋がり、そして走り回って遊ぶ子ども達の笑顔があった。決して、便利な環境ではないが、幸せに感じるものが何度もあった。恵まれた環境で裕福に暮らすことが幸せだと考えていた私にとって衝撃的で価値観を大きく変えるものだった。

村の生活は常に自然に囲まれている。漁師達は毎日吹く強い風だけを利用して沖に出る。船にはエンジンもオールもない。夕方になると砂丘に登り地平線に沈む夕日を見て「また明日」と挨拶する。日中その太陽を見上げれば時間がわかる。そのためほとんどの村人が腕時計をしていない。日本のように分刻みで時間に縛られることはなく、ゆっくりと時間が流れる。そのなかでいつでも誰かが楽しそうに立ち話をしている。そのほとんどの村人が親戚の関係ということもあり、お互いに支え合って生活している。ある女の子の誕生日会には友達から漁師のおじさんまでたくさんの方がお祝いに駆けつける暖かい雰囲気印象的であった。子ども達は誰の家とか関係なくかくれ

んぼをして、村全体が公園のようだ。ゆっくりと流れる時間が流れる中で子ども達だけが慌しく走り回っている。木でもごみでもちよつとした坂道でも利用して楽しむ。彼らは本当に遊びの天才だ。私も一緒に走って走っていたから、足が早くなった気がする。

この素晴らしい環境が失われつつあるも事実である。村を出ると近年開発が進む観光街があり、そこでは麻薬や売春が行われており、夜両親が外出し家で寂しい思いをしている子どもがいる。子ども達のなかにはとても寂しいが、り屋や独占欲が強い子がいるのはこのような背景があるからだそう。また、この一年で砂丘に五機の風力発電機が設置され、自慢の景観が壊されてしまった。世界中で失われたものがこの村にはまだ残っている。一度失ったものを取り戻すことは難しいと世界各地で苦労していることからわかる。失われる前に行動を起こし守る必要がある。何かの縁で辿り着いたこの村に関わり続けたい、そして多くの人に知って欲しい。

二、新しい自分を発見

周囲の環境が変わったから自分も変わってしまったのかと思うくらい新しい自分に出会った。私は寂しがり屋の泣き虫だということ。ブラジルに滞在中に五回は涙を流した。もちろん誰にも気づかれず静かに泣いた。カノアケブラーダを離れる時、皆と会えなくなるのがとても悲しくて泣いた。なぜか



下向井稔史

考えた時に、人との繋がりや大事にする自分に気づいた。私が幸せと感じる時いつも誰かがそばにいる。周囲の人の幸せなしに自分の幸せはないと考える私にとって周囲の人は本当に大切な存在だと気づいた。

三、変わる意識

大切な人がいるブラジルに何か恩返しをしないと考えている。当初、何かお手伝いさせていたが、私ばかりがたくさんの学びと気づきをもたらしていた。ブラジルに何か与えるには十年、二十年早いと突き返された気分だ。現在就職活動しているが、将来的にはブラジルに係る仕事をしたいという気持ちがある。それを実現できる企業ばかり探している。将来どんな形であれ恩返しをする。私の決意であり、夢である。

四、最後に

スタディツアーに関わっていただいた全ての方々に感謝します。皆様のご助力なしにこのような経験を得ることはできませんでした。今後も長谷川ゼミ生がブラジルへ研修に行く流れを絶やさないように努めます。



た。何かに一生懸命取り組み、やりがいを感じている彼女たちを見て、一人でもそんな若者がこの村に増えてほしいと思います。

とはいえ、エステーバン村の子ども、若者たちの原動力は何と云っても自然です。海で泳いで、砂丘を走り、木の

実で栄養補給。週末(平日も)は、彼らとそんな大自然の中で体力の限界に挑戦します。彼らが自然と触れ合っている姿、また木工所で一生懸命に働く女の子の姿、そこに私の心を満たすようなそんなエネルギーを感じました。

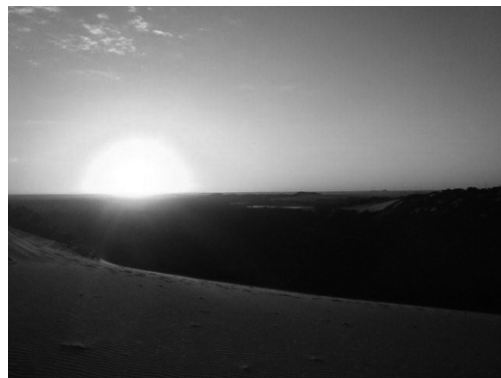
また、私たち学生は毎晩ミーティングを開き、意見交換をしました。ここでは、研究テーマを持っている者、ボランティア経験者など、それぞれの視点からの意見交換ができ、非常に新鮮でした。

若者たちと一緒に行ったフェスタも、彼らの力なしではできないものではありませんでした。逆に言えば、それだけ彼らも責任感を持って物事に取り組んでくれていました。

四週間エステーバン村に滞在させてもらい、肌はこがり焼け、心肺能力もかなり上がったような気がします。それ以上に、自然、エステーバン村の人々、他の学生たちから心に染みる素晴らしいエネルギーをたくさんもらいました。

また、今回はスタディツアーという形でエステーバン村に滞在させてもらいましたので、多方面の方々に協力していただきました。今回の素晴らしいスタディツアーを無事に終えることができましたのも、関係者の皆さまのおかげです。本当にありがとうございます。そして、私たちが受け入れてくだ

さった、鈴木真由美さんはじめ、エステーバン村のみなさん、本当にありがとうございます。ありがとうございました。



信広翔

二〇〇九年十一月、今新たな視点から八月から九月にかけて行われたスタディツアーを振り返り、自分の学んだことを整理してみたいと思います。

大学を休学すると決めてからブラジルに行くまでの約半年間、長いようであっという間でした。詳しくは述べませんが、僕の場合休学することを親に反対されていたこともあって、親に迷惑だけはかけないようお金の面でしっかりと余分を貯めていく必要があり、一時は五つのバイトを掛け持ちしていたこともありました。こうして自分がブラジルに行く準備と平行しながらスタディツアーの企画を行うのは、正直とてもしんどかったです。

この当時の自分を考えて今の僕が今思うのは、甘く弱い自分です。日々の

生活に追われ、自分のことで精一杯だとしても、自分がやることによって他人を巻き込んで以上責任は果たさなければいけません。それは、当たり前のことです。しかしそれが全く不十分だったことを痛感しました。

「なんとかなる」とどこかで思い込んでいた僕は、細かい点や先を見通した準備など、ほとんど人に言われるまで気づかなかったのが事実です。軽く考えすぎでした。明らかな責任感の欠如でした。

そして、自分の限界を何も知らなかったのです。今回のツアーでは運よく「なんとかなった」だけであって、何かが起こった時のことを想定すると、自分では何もできない何も知らないことに気づきました。それを認めざるを得ませんでした。よく言う「無知の無知」でした。

ツアー直前に一気にバタバタして、結局大勢の人に迷惑をおかけすることとなりながらも、なんとか最低限(今考えるとそれにも至らないですが)の準備をしてから、いざスタディツアーがスタートしました。

そんなことがあったので、ツアー運営中は気を張りすぎていくくらいに緊張していました。少しでも気になったことはお互いに言えるような環境づくりに、真由美さんへの日々の活動の報告や相談、そして心配してくださっている皆様にご利用以上ご心配をおかけしないために毎日報告メールは細かに送り続けました。

これは想像よりも遥かに労力があることでしたが、なんとか続けることができ、運営中での最低限の責任を果たすことはできたのかなと感じていま

す。しかしそれができたのは、ツアー参加者の皆のおかげだということは言うまでもありません。

意識の高い参加者ばかりだったので、お互いがお互いのことを尊重し合っていました。それこそが、僕を含め皆が意識の高いレベルのままツアーを終えることができ、僕自身も最後まで責任を果たすことができた大きな理由の一つだったと思っています。

「土俵の真ん中で相撲をとれ」。

どんなことでも土俵の真ん中にいる時は余裕があり安心してしまいがちです。テストや受験、課題など自分だけのことであればそれは構わないことなのかもしれません。ですが、他人と関わる、つまりこれから社会に出ていく以上は、自分にできることを最大限行うために常に力を振り絞り、事前に手を打ちながら行動していく責任があると思いました。今回「なんとかなった」ツアーの裏には、多くの方の助けがあったことはもう言うまでもありません。その中には、僕が自分で考え行動できていたであろうことはたくさんあります。

こうして情けない自分を嫌でも痛感することになりましたが、そのおかげでこうして学ぶことができたことに感謝し、この教訓をこれからの自分に活かしていきたいと思えます。それが、今回多大な協力をしてくださった皆さんへの感謝の形であると思っています。

また、このスタディーツアー。僕は企画運営をしながらも、自分もその参加者の一人として行動していました。なので、実際にカノアで色んなことを体験しながら学ぶことは多くあります。

学童保育、保育園の教育体験に始まり、大勢の村人で行ったペンキ塗り、村のゴミ拾い、木工所の手伝い、日本文化教室として行った空手、歌、ソーラン節。ヘガツタの際には若者と議論しながら原価を割り出したりして商品の価格を決めました。そして最後には青年団と共に一生懸命つくり上げた芸術祭……

そんな多くの活動を通して一番心に残ったのは、カノアの村人はもちろんのこと、日本人五人と朝から夜まで共同生活をする中で自分の自己というものの一部に気づいたことです。

このツアー中、多くのことを体験しながら多くの人と触れ合う中で、多くの考え方、価値観とも出会いました。どんな価値観も決して全てが同じわけではなく、例えば日本人同士でももちろん異なっています。

色んな価値観を受け入れ、自分の価値観を広げていく、自分を変えていくということは成長につながると思えます。ですが今回、そうやって色んな価値観と触れ合い成長していく中で、どうしても受け入れることができない価値観にも出会いました。そこでその価値観と自分を比較することで、自分とどんな人間であるのかを強く受け入れることになったのです。

周りがどうであって、自分はこれだけはしたくない。こうしたい。こうありたい。そうやって自己というものに触れられたことは、自分にとってはとても大きなことでした。

これから僕に必要なのは、自分とは違う価値観に出会った時、それを尊重することでしょう。他人の価値観を尊重するというのは言葉にすると簡単で

すが、自分とそれが離れていなければならないほど実際に受け入れるのは本当に難しいことだと思えます。それでも一緒に生きていく相手ならば、その「違い」を共有しながらお互いに認め合うことが必要であると感じました。更に、一緒に何か物事を推し進めていく場合には、お互いの価値観を尊重した上で結論を出すということも必要になってくるでしょう。そこには柔軟性はもちろんのこと、時には自分の意見を通せるような説得力も大切だと思います。

こういったことは、少し考えれば簡単に言葉は出てくると思いますが、今回のこのスタディーツアーで僕は自分の自己というものがあると強く認識したからこそ、身をもってこれらの必要性を感じるようになりました。耳で聞く、口で言うのは簡単でも、自分で感じることはなかなか難しいものです。それを感じることができたということは、これからの人生にとっても役に立つ価値のあることだろうと思えます。

ただ、それができたのも意識の高い参加者が周りにいたからこそです。そして、村人、特にグループジョーベン達の積極的な活動があったからこそです。自分一人では物事を成しては、価値観がぶつかり合うこともなく、このことに僕は決して気づくことはなかったでしょう。

最後になりましたが、このツアーに協力してくださった多くの方々、カノアの村人達、参加者の皆さん、そして最初から最後までこのツアーを支えてくださった鈴木真由美さんに、心から感謝の意を述べたいと思います。本当にありがとうございました。





カノアでの活動や生活を通して、皆さんと共に学びあうことができるのではないだろうか？そんな思いから、現在下記の雑誌にカノアの活動のこと、日常生活で感じたことなどを連載しています。ご興味のある方はぜひご覧下さい。

■めたもるふおーぜ

〒520-2271

滋賀県大津市稲津 2-15-6 (黒川方)

tel / fax : 077-546-4147

e-mail : metamor4se@yahoo.co.jp

http://www.geocities.jp/metamoru4se/

光の子どもたちの会

平成 21 年 6 月 29 日～平成 21 年 10 月 13 日現在までに会費及び寄付を頂きました皆さま及び物資支援を頂きました皆さまのお名前を下記に記載いたしました。この場をお借りして、心より御礼申し上げます。本当にありがとうございました。これから一人でも多くの方に会員になって頂き、カノアの活動を共に支えていただけると嬉しいです。目標会員 100 名!!

「光の子どもたちの会」では、会員、協力会員を募集しています。支える会では「手工芸品の販売」「講演会」などにより多少の収入がありますが、充分な額ではありません。会の運営は全てボランティアにより運営されています。1 人でも多くの方々に会員、協力会員になっていただき、この会を支えていただきたいのです。

頂きました会員費、協力会員費及び寄附などは、支える会の活動費、運営費となります。会員の方々には年 2 回の会報、講演会や、イベントなどのお知らせを、ブラジル事務局よりお送りいたします。

会費及び寄付を頂きました皆様

(以下順不同)

稲谷千比呂さま
宇野秀郎さま
大谷タカコさま
金本リセ子さま
桑山寛子さま
鈴木康平さま
聖夜劇の会さま
信広翔さま
村上誠さま
吉田可南子さま

一般会員：年会費 5000 円

協力会員：年会費 1 口 36000 円以上任意額

尚、寄附、カンパは随時受け付けています。

■郵便振替

口座番号：00280-1-41787

加入者名：光の子どもたちーカノアの活動を支える会

■ブラジル銀行 (Banco do Brasil) 口座

Agencia 0121-x

Conta Corrente 26357-5

Associacao Crianças de LUZ

物資支援を頂きました皆様

(以下順不同)

桑山寛子さま
秦野市立北小学校 5 年の皆さま
藤本くみさま
三浦左千夫さま
Maresia

12/19 ブラジル料理教室

パオン・ジ・ケージョ (チーズパン) とコシーニャ (ブラジル風チキンロロケ) を作ろう!!!

日時：12/19 (土) 13:30-16:30

場所：目黒区民センター社会教育館 8F 調理室

講師：阿部孝子さん

参加費：1,000 円

*また、料理教室後、18:00- 目黒付近にて忘年会も企画しております！ご都合よろしければ、こちらもご参加いただければと思います。

*尚、参加費の一部は光の子どもたちの会の活動資金として使わせていただきます。

*参加希望者は 12/6 までに下記までご連絡ください。

sachiko_t7@hotmail.com (谷村)

持ち物：エプロン、三角巾

主催：光の子どもたちの会

「光の子どもたちの会」日本事務局 (堀池事務局長)

tel / fax : 045-321-1824

e-mail : horiike59@msi.biglobe.ne.jp

ボランティアの皆さん、どうもありがとうございました！ (以下 2008 年 8 月より現在まで)

2008/8/1 ~ 2009/7/29 : Harm Timme

2009/3/13 ~ 2009/7/2 : Marina Sujani Karlsson

2009/6/20 ~ 2009/8/20 : Leidivania Abreu da Mata

2009/7/30 ~ 現在 : Mark Arenz

2009/9/13 ~ 現在 : Leah Fisches

2009/8/16 ~ 現在 : 信広 翔

2009/9/28 ~ 現在 : 高橋 沙織

2009/9/28 ~ 現在 : 星 久美子

2009/9/28 ~ 現在 : 義村 翼

ドイツ人、保育園の助手、青少年グループに参加、協力

スウェーデン人、英会話教室を開講

ブラジル人、保育園助手、手工芸講座を開講

ドイツ人、学童教室助手、サッカー教室助手

ドイツ人、保育園助手、音楽プロジェクトサポート

木工所助手、コミュニティーセンター管理、日本語教室を開講

給食室及び用務員サポート、ジャンガータ伝承事業実施

給食室及び用務員サポート、青少年意識向上事業実施

給食室及び用務員サポート、植林事業実施

*スタディーツアー参加者 (2009/8/16 ~ 2009/9/14) : 宇野秀郎、下向井稔史、鈴木康平、福井俊紀